



令和4年度 東京都北区立堀船中学校

堀船中だより

心身ともに健康にして、国際的視野に立って社会に貢献し、自立した人を育成する。

教育目標

自ら学び 自ら考え 自ら行動できる生徒

令和4年9月 第6号

校長 阿久津 光生

〒114-0004

東京都北区堀船 2-23-20

Tel 03-3911-8817

《9月1日（木）一学期後半がスタートしました》

いよいよ、今日9月1日（木）から一学期後半がスタートしました。放送にて行った全校集会の校長あいさつの一部を掲載したいと思います。

「みなさん、夏休みはいかがでしたでしょうか？本来であれば、夏休み初日から、1年生は待ちに待った岩井臨海学園でしたが、新型コロナウイルス感染症拡大のため中止となってしまいました。1年生のみなさんも保護者の皆さんも、岩井臨海学園のための宿泊等のご準備をされてこられたのにも関わらず、大変申し訳なく思っております。また、部活動の夏の大会への出場や、家族で旅行等する予定だった人も多かったと思いますが、こういった状況になってしまい、本当に気の毒でなりません。

さて、これから1学期後半が始まるにあたって、みなさんにお伝えしたいことが3つあります。

まずは、感染症や熱中症・事故・ケガ等には十分気をつけて過ごして欲しいということです。生命の安心・安全が何よりも大切です。第2は、自分の目標に向かって、スモールステップで精一杯頑張ることです。どんな逆境でも、ピンチをチャンスに変えるという思いを持って、焦らずコツコツと努力していけば、目標に必ず到達することができます。前を向いて進んでいきましょう。第3は、一人で悩まないこと、助け合うことです。悩みは、誰もが持っています。1人で悩まず、先生や友人、さまざまな相談窓口に話してください。そして、他人の痛みや苦しみを理解して、互いに信頼し合い、協力しあっていきましょう。

生徒の皆さんと教職員一同で力を合わせて、温かい学校をつくりあげていきましょう」

《1年生、富山県高岡市立福岡中学校と、「高峰譲吉博士」についてオンラインで交流学习を行いました》

1年生は、7月12日（火）14時30分から富山県高岡市立福岡中学校と、「高峰譲吉博士」についてオンラインで交流学习を行いました。

高峰譲吉は、「アドレナリン」の発見や、消化酵素「タカジアスターゼ」の開発で知られる化学者です。北区に居を構え、「日本資本主義の父」と呼ばれた渋沢栄一と、富山県高岡市出身の高峰譲吉との親交が縁となり、堀船中1年生と、富山県高岡市立福岡中学校生徒が、互いの研究成果をオンラインで発表し合いました。富山県高岡市と東京都北区と、普段は遠く離れて暮らす生徒のみなさんですが、2人の偉人を通して接点が生まれ、共に学び合うことができた貴重な機会となりました。



なお、福岡中学校の方にはNHK富山放送が入り、オンライン授業の様子がその日のうちに放映された上、翌日の地方新聞各社の朝刊にも記事が大きく取り上げられました。堀船中には、当日読売新聞の記者の方が取材に来てくださり、7月28日（木）の朝刊にて大きく掲載されました。

今後もさまざまなかたちで、福岡中学校のみなさんと交流を図っていききたいと思います。高岡市立福岡中学校のみなさんと高岡市教育委員会の皆さま、そして今回、このような機会をコーディネートしてくださいましたNPO法人高峰譲吉博士研究会のみなさまに、改めて感謝申し上げます。

《二松学舎大学附属高等学校長 鵜飼敦之先生をお迎えして、第2回進路説明会を開催しました》

7月14日（木）14時30分より、本校体育館において、3学年生徒・全学年保護者を対象に、第2回進路説明会を開催しました。

今回は、講師に二松学舎大学附属高等学校の鵜飼敦之校長先生をお迎えして、現在の高等学校（都立、私立）についてご講演を頂きました。その後、本校を昨年度卒業した先輩からのメッセージビデオレターを見ました。

鵜飼校長先生は、御準備してくださった貴重な資料をもとに、示唆に富んだ専門性の高い内容を、非常に分かりやすくお話していただきました。都立高校、私立高校の特色など、大変勉強になりました。また、卒業生の張さん・池邊さんは、ビデオレターで、受験勉強に対する的確なアドバイスをしてくれました。お二人の体験談を聴いて、この夏、3年生は受験に向けて頑張る意気込みを強くしたと思います。多くの保護者の皆さまにご参加いただきましたことを心より感謝申し上げます。



なお、二松学舎大学附属高等学校は、この夏甲子園に出場し、3回戦進出を果たしました。本当におめでとうございます。

北里柴三郎の歩んだ道（7）～ペスト菌の発見～

横浜港に到着した船から降りる北里を待ち受けていたのは、2,000 人を超える人々の歓声でした。しかしそこには、北里をドイツに派遣した内務省をはじめとする政府の関係者、東京大学医学部の関係者の顔触れはほとんど見受けられませんでした。休む間もなく内務省や東京大学医学部に顔を出した北里は、ようやく自分が置かれた立場を理解することになります。

北里は、緒方正規の「脚気菌」説を完全に否定したことで、緒方本人はもとより、陸軍医をはじめ多くの医者達に煙たがられる存在になっていたのです。軍や役所や大学に席を置く医者にとって、身内の有力者が主張する「真実」の方が正しい答えだったのでしょう。すっかり居場所を失ってしまった北里のことを心配した長与専斎（※北里が所属する内務省衛生局の初代局長。この頃は「大日本私立衛生会」＝現在の日本公衆衛生協会の副会頭）は、北里の苦境を伝えるべく、ある人物のもとを訪れました。それは、教育者として既に著名だった福沢諭吉でした。長与は福沢に、北里が内務省や東京大学から冷遇され、研究を続ける場所がないことを相談します。すると福沢は、私財を投じて、北里のために東京の芝区芝公園 5-3（現在の東京都港区芝公園 1）に「私立伝染病研究所」を設立し、その初代所長に北里を任命しました。また、翌年には、日本で初めての結核専門病院「土筆ヶ岡養生園」を開院しました。しかしこれらはドイツのコッホ研究所、フランスのパスツール研究所と比べればあまりに小さく、手狭な研究所でした。そこで、明治 27（1894）年 2 月、内務省の土地を借りて、東京の芝区愛宕町（現在の東京都港区西新橋 3）に新しい研究所を開設します。研究環境が充実することを考えれば、伝染病研究所が広がったことは北里にとって大変嬉しいことでした。しかし一方で、内務省の土地を借用するのは、役所に借りができたような気がして、手放しでは喜ばませんでした。



福沢諭吉肖像画
【提供】学校法人北里研究所
北里柴三郎記念室



伝染病研究所発祥の地
港区芝公園 1-1 御成門駅 A3b 出口そば

愛宕町に研究所が移転して 3 か月が過ぎた 5 月のこと、香港から内務省衛生局に連絡が入りました。中国の雲南省の山岳地帯で発生したペストが、東へ東へと伝染し、中国南部の広東省を経由して、ついに香港に到達したということでした。ペストは感染すると皮膚が黒くなることから「黒死病」と呼ばれ、この病気による死亡率は非常に高いものでした。14 世紀には、わずか数年でヨーロッパの全人口の 3 分の 1 を死亡させたと言われていました。日本への侵入を食い止めるために、まずペストの原因を突き止めなければならないと考えた政府は、伝染病研究所の北里と、東京大学医学部教授の青山胤通を香港に派遣することにしました。この青山は、東京大学医学部時代から北里と交流があった人物です。ある時、外国人教師からの質問にうまく答えられないのを北里が笑ってしまったた

め、恨みを買っていた相手でした。世界的な名声を得た北里と、国内トップの実力者の青山。学生時代のことを忘れない青山が北里に送る視線は非常に厳しく、激しいライバル関係が続いていましたが、くしくもこの時、2 人は同じ目的に向かって手を組むことになりました。明治 27（1894）年 6 月 5 日、北里らに乗せた船は横浜港から出帆すると、6 月 12 日に香港に到着します。香港では、ペストによって 5 月末から 1 週間あまりで 577 人が死亡、230 人が治療中という惨状でした。到着した 2 日後には、青山が死者を解剖し、北里が血液、脾臓、リンパ腺腫などを検査しました。その結果、北里は、ペストの原因はこれまで発見されていなかった「ペスト菌」にあると判断します。さらに解剖と検査を続けた北里は、6 月 18 日にはペスト菌の存在を内外に正式に公表しました。

一方、同じ香港でペスト菌を発見した研究者がもう一人います。それは、パスツール研究所のフランス人研究者・イエールサンという人物です。もっともイエールサンの発見は北里より数日遅れていたもので、ペスト菌を世界で初めて確認したのは北里その人でした。香港のペスト騒動から 5 年後の 1899（明治 32）年には、日本国内（神戸）でもペスト菌が検出されています。北里はこの時も調査に赴きましたが、見つかったのは香港でイエールサンが発見した「グラム陰性」という型でした。脚気を巡る論争をはじめ、北里を快く思っていなかった森鷗外らは、イエールサンを支持して、北里の発見は誤りだったのではないかと攻撃します。世界に認められた北里でしたが、母国の同業者に認められないという矛盾に苦しみ続けました。そうしていつの間にか、ペスト菌を発見したのはイエールサンという定説が広まってしまうのです。この後、ペスト菌に関する北里の真の功績が認められるのには、長い年月が費やされることとなります。